

「修士論文を書く「苦しみ」こそが「学び」である」

社会福祉学専攻 原田 和広（平成 25 年度修了）

修士論文をこれから執筆する皆様に、先に修士論文を何とか書き終えた者として、下記に自身の体験を記します。字数の制限がありますので、敢えて、私が行った質的研究に関するアドバイスをやりたいと思います。従って、量的研究を考えている方には、あまり役立たないかもしれません。

質的研究を行う場合は、量的研究よりも遥かに手間暇がかかることを覚悟して下さい。途中で研究対象の変更等はほぼ不可能だと思いますので、慎重に論文のテーマを決める必要があります。これは、指導教官の先生にアドバイスを仰ぐのが間違い無いと思いますが、まず過去の先行研究に十分に目を通しましょう。自分が関心を持ったテーマに対して、既にどのような研究がなされているのかを CiNii 等で検索し、無料なものだけでなく、なるべく有料なものまで入手することをお勧めします。最近は Web 上で PDF をダウンロードする形で直ぐに手に入る論文も多く、ペーパーベースでしか存在せず、学会誌等に含まれている場合は、該当する号だけをインターネットで注文し、取り寄せることもできます。先行研究は当然何らかの先行研究に基づいて書かれていますので、参考文献に丹念に目を通して孫引きする形で、更に目を通すべき論文を具体的に絞ることができます。

私は、自分の研究テーマに対しては質的研究しかあり得ないと考えたため、手法としてはグラウンデッド・セオリーを選びました。この手法を用いた研究を行って感じたことは、二年時を全て修士論文のために準備していたにもかかわらず、時間的に全く足りなかったということです。

私は 10 人のインフォーマントに 1~2 時間の半構造化インタビューを行い、更に補足資料として 4 種類の心理検査を実施しました。インタビューを実施して感じたことは、直接面識が無い知人の紹介によるインフォーマントの場合、ラポールの形成ができないとなかなか深い話をしてくれないということです。私の研究の場合は、質問項目の中に過去の虐待や不幸な生育歴、現在の精神疾患や性的な逸脱等、非常に語り難いテーマを含んでいました。まして、そのようなテーマを若い女性のインフォーマントが男性である自分にする訳ですから、質問を半構造化していてもそれを切り出すタイミングが難しく、結果、インタビューは真剣にクライアントの話を聴くカウンセリング以上に苦勞しました。インタビュー時の注意としては、最近の IC レコーダーは、無音状態を録音せず、記憶容量の無駄使

いを防ぐ機能が付いていますが、これは使用しない方が賢明です。デリケートな話題になると、インフォーマントの声が低くなります。そういう大切な箇所が無音と認識されて音が飛んだりすると、逐語記録に起こす作業が無駄に大変になります。逐語記録に起こす時間は、インタビューの3~4倍はかかることを覚悟して下さい。

無事逐語記録が起こせたら、今度は一行ごとにコーディングを行うのですが、簡潔に見出しを付けて行くだけで、10人分の逐語データ（1人あたり2万字程度）だと、それだけで500を超えました。次に、それらを整理し、論理的なコーディングとクラスター化（図式化）を行うために、大量のメモが必要になります。グラウンデッド・セオリーは「データ対話型の研究」ですので、インタビューし、逐語記録に起こすのは研究のスタートに過ぎません。それにコーディングをしながら何度も何度も目を通し、浮き上がって来る新しい視点は逐一メモに書き留めます。そして、そこからテーマを考察し、再度先行研究と参考文献を読み直し、また繰り返し手元のデータを読んでメモを書く、という作業を延々と続けているうちに、最初はさほど意味が無いように思えたナラティブが全くの別物に見えて来ます。そして、テーマに対する考察が当初の想定からどんどん深まって来ます。

私の研究は、「キャバクラ嬢と社会的排除」をテーマにスタートしました。当初は、「職業スティグマ」に重きを置いて文献に当たっていましたが、途中雨宮処凛女史がキャバクラ嬢だったことから、社会学的なスティグマ研究から一旦離れて、プレカリアート関連の文献を読み始めた所、次々メモの数が増え、労働経済学、教育学等に話が膨らみ、読むべき先行研究の数が一気に膨大になりました。次に、ジェンダー関係の文献、精神保健の文献に当たっていると、まだ一文字も論文を書かず、ただデータと対話して論文のイメージを膨らませているだけなのに、既に季節は12月に入っていました。当初は社会学、社会福祉学、心理学関連の文献が中心でしたが、気付いたら教育学や哲学・現代思想にまで領域が膨らんでいました。

文献を読むことは終わりが無いので、「ここまでの蓄積と手元のデータで修士論文を書こう」と決めたのが、12月の中旬です。結局、執筆にかけた時間は、年末年始の9日間と提出日（1月20日）前日までの土日祝日の全てですが、仕事を持つ身で休日の起きている時間の全てを修士論文執筆に当てることは精神的にも肉体的にも苦しく、何度か途中で「もう一年かけてより良いものにしようか」という誘惑にとらわれました。しかし、三浦剛先生から一緒に指導を受けていた仲間達5人全員で今年一緒に卒業しようとして互いに励まし合い、何とか18日の夜に修士論文が書き上がり、19日に印刷し、その日に速達で大学に郵送

して 20 日の提出日に間に合わせるという強行スケジュールになりました。

余裕を持って修士論文を書くということは、仕事を持っている通信制の学生には難しいことだと思います。しかし、どんなに中途半端になろうとも、二年間学んで来たことを論文という形にまとめる辛く、苦しい作業の中に、かけがえの無い達成感と充実した学びがあることを実感し、改めて東北福祉大学で価値ある二年間を過ごすことができたとは非常に感慨深い思いがします。

自分一人では到底辿り着けなかった考察に導いて下さった三浦剛先生、そして、同じ目標のために支え合った仲間達に心から感謝の言葉を申し上げて、結びと致します。

「修士論文作成を振り返って」

福祉心理学専攻 小関 友記（平成 25 年度修了）

昨年度、東北福祉大学通信制大学院福祉心理学専攻を修了することができました。この場を借りて、修士論文の作成過程で特に印象的なことを記したいと思います。

修士論文を作成することは、大学院入学時より研究計画の提出が求められているように、入学時より始まっています。すなわち大学院で何を学びたいのか、何を得たいのかを明確にしておくことが非常に重要です。そこで今、その当時の研究計画を読み直してみたのですが…よくこのような曖昧でかつ煩雑な内容で研究を進めようと思えたなあ、と昔の自分に感心してしまいます。しかし、今こうして、この構想で始めても研究はうまく行かないだろうということがわかるようになっただけでも成長したと言えると思います。

通信制の大学院ですのでレポート課題のテーマに沿って文献を十分に熟読し、自分の現実に沿ってその課題がどのような意味を持っているかをレポートに表し、レポート添削の機会を待つこととなります。安易に答えを得られるよりも、通信指導で十分に考え、文章にして表現し、その推敲を行うという機会は、修士論文の研究構想をより明確にする上でも非常に有用な段階であったと考えています。

また課題やスクーリングに参加し実感できたことなのですが、様々な知識を得るよりも、自分の考えをより深く考える、捉え直す必要があるということです。常に様々な先生方から少ないスクーリングや面接指導の際に「独立因子と従属因子をはっきりさせなさい」と言われ続けてきました。それは人間の心理という目に見えず、様々な影響を受けているであろうものを概念として扱うには、その定義をしっかりと理解し、それに沿って因果関係を十分に考察した上で研究を進めることが大前提なのだ、ということと捉えています。振り返れば、その概念について考え尽くすことが、この研究で最も苦しく、またある程度できるようになってからはとても楽しい時間となりました。

私は専門学校の教員として働いているため、そこにいる学生の学習に対する自信はどこから生まれるのだろうか、それを心理学の分野で少しでも理解できないだろうか、ということの研究構想として持っていました。そして専門学校で教えている内容は脳科学や認知神経学に触れる機会が多く、また大学院 1 年次においてもその概要を勉強する機会を得ることが出来ました。学習への自信は脳の部位のどのような機構によって生まれるのか、その一部でも影響を与えていそうな概念は何なのか…と大学院での研究テーマが実感できた

瞬間は大学院1年次の秋ごろでした。

正直、研究を始めた初期には、仕事などで時間が限られている中で、調査や統計処理、論文の書き上げなどをこなしていくことは非常に困難な道のりに感じられ、気持ちが焦りました。だからこそ、どの時期にどのようなことを終わらせるか、という研究のスケジュールを立てることは非常に重要でした。自分の生活や仕事、研究協力していただく方々の状況を現実的に捉えて、ショートステップで研究作業を細分化していくことで、心理的に余裕を得ることができました。もちろん自分だけでは見落としもありますので、指導教員の先生と、メールや面接指導で様々な相談を行いました。様々なアドバイスをいただいたことで、本当に余裕を持って論文作成を行うことができました。皆川先生にはこの場を借りて御礼を申し上げます。本当にありがとうございました。

あとはそのスケジュールに乗っ取って、コツコツと頭と体と指を動かしていきました。もちろん細かいところで迷うところもあります。しかし時間をおいてから考えを整理してみると解決できました。脳科学的にも、脳細胞が再構成されるには一定の時間が必要です。決して焦らず、自分を追い詰めないことが大事だと学びました。そして、これだけ自分は綿密なスケジュールに乗っ取って動いているのだから、指導教員もいるのだから、きっと研究は成功し、様々な知識と理解が得られると信じていました。自分のやったこと、やろうとしていることを信じるのが最も大事かもしれません。

私の体験談が参考になるかどうかはわかりませんが、これから大学院で研究を始められる方はかけがえのない時間となると思います。皆様の研究の成功を心よりお祈りいたします。